



- 1943年 8月 26日生まれ
 - 水俣病患者家族。
 - 漁業組合の参事をしていた父と漁師の患者宅を回っていた幼少時の思いや、困窮した漁師の生活、父が発病し、亡くなるまでの闘病生活を語る。
 - 2013年10月から水俣病資料館の「語り部」となる。
- 水俣市塩浜町在住

みなみ

南 アユ子さん

私は1943年(昭和18年)、長崎県五島町に7人兄弟の長女として生まれ、3歳の頃、父の地元である水俣市丸島町に引っ越してきました。

父は水俣市漁業協同組合で事務員をしていたので、日頃から漁師さんたちと親しく付き合っていました。市場に出した残りの魚をいただくことも多く、家族で毎日のようにたくさんの魚を食べていたものです。

その頃、私は父と共に自転車に乗り、月浦や坪谷など、漁師さんの家々を回って、妹弟が着なくなった衣類などを届けていたのですが、人が住んでいるとは思えないような家の奥に、自力で歩くことのできない子ども、話すことのできない子どもの姿を見ることがありました。当時小学生だった私には事情が分からず、また、父から「今見たことは誰にも話すな」と口止めされていたので、誰にも話せないままでしたが、今思えば、あの子どもたちは胎児性の水俣病患者さんだったのです。困窮した漁師さんたちの生活の様子は今でも頭から離れず、本当に心が痛みます。



父はかねがね「水俣病は漁師がなる病気だから、事務屋の俺は絶対に水俣病にはならない」と言っていたのですが、ある時、その父が発症しました。劇症型の水俣病でした。それからは、視野が狭くなる、味が分からないなど、様々な症状で苦しむ父を兄弟で押さえつけ、無理やり点滴を受けさせる毎日でした。治療の甲斐もなく、父は発病から2年で亡くなりました。

今、私にも、父と同じような症状が出ています。自分がそれらの症状を自覚するにつれて、当時の父がどれほど辛い思いをしたか分かるようになりました。いつまで自分の足で歩けるのか、不安な日々を過ごしていますが、当時の父が漁師さんたち、患者さんたちを支援していた思いを受け継いで、偏見や差別が少しでも無くなることを祈りながら、今後も頑張っ